

甲州青柳村七兵衛の一生



青柳村七兵衛息子勘当願（甲斐国巨摩郡青柳村秋山家文書）

江戸時代、甲州青柳の地は鰍沢・黒沢とともに甲州の河川流通の拠点であり、信州・甲州の産物を太平洋へ、全国の産物を信州・甲州へともたらす物資の集積地であった。その地で村役人を務めた秋山家の古文書一三〇点は一九四七年に文部省へ譲渡され、その後文部省史料館に移管されて現在に至っている。そこで秋山家文書から江戸時代の一村人「七兵衛」の人生をスケッチしてみよう（ ）は文書の請求番号）。

浅間山噴火やそれに伴う不作、権力の愚策による飢饉で苦しんでいた一七八七年、七兵衛は青柳村七右衛門の子として生まれた。父は村内でも中くらい規模の田畑を所持し、二人の召使いを召し抱えていた(54)。少年・青年期についてはわからないが、この頃から家で所持している田畑の規模は広がっており、七兵衛青年期にはそれまでの六倍以上の田畑を所持するに至っている(42)。七兵衛は二十六歳の時に近隣の村から八歳年下のたけ(別名「たき」という女性を娶り(64)、父の死後、村役人を務めることとなった(563)。当時は農業とともに油売りも行っていたようだ(今川徳三『甲州侠客伝』)。しかし、父の死後、所持していた土地は人手に渡り、一八三六年にはわずかに屋敷・畑合わせて一反四歩(三〇四坪)に減っていた(4)。これは最盛期のわずか三%に過ぎない。秋山家小作人からの年貢を記した「小作勘定帳」(619)によれば七兵衛は秋山家の小作人のひとりに数えられているが、支払い未進が見られ、困窮していたことがうかがえよう。困窮の原因を明らかにすることはできない。一因として天保の飢饉の影響があるものと思われる。

時に十九世紀前半。博徒が暗躍する社会状況はすでに民衆運動史研究で詳細に明らかにされているが、人・モノの交流点として発展してきた青柳村もその渦中にあった。当時の青柳村は博奕や傷害、殺人事件までも起こっている。ところで、七兵衛とたけとの間にはふたりの息子が生まれたが、七兵衛六十二歳の時、生活が悪化の一途を辿る一八四九年、ふたりの息子を勘当している(546)。その理由は農業に従事せず遊び歩いていたことが原因だが、当時の青柳村を取り巻く社会状況が影響していないとは言えない。こうして戸籍「宗旨人別改帳」(84)のふたりのところには「死失」という貼紙が張られた。勘当とは死である。七兵衛とたけは婿を迎えるが折が合わなかったのか離縁(87)、安政の大地震で家が全壊し(604)、その直後に七兵衛は七〇歳前後で亡くなった(93)。なお、ふたりの息子、市松・虎之助は鰍沢で賭場を開き、甲州の博徒・侠客として勢力を張るが、博奕そのもつれから悲惨な最期を遂げた(今川徳三『甲州侠客伝』)。

昨今、自己責任論を叫ぶ風潮があるが、七兵衛の貧困、息子の博徒化と非業の死、これらを自己責任で短絡的に片付けてよいのか、改めて歴史資料は現代の問題を考えさせてくれる。

(西村慎太郎)